

河野有理著

『田口卯吉の夢』

(慶應義塾大学出版会・二〇一三年)

松田 宏一郎

実はそこからこそ生まれる政治思想を切り出してみるという方法である。個人の利益極大化戦略以外に人間の社会的活動の動機付けを認めないように思われる人間を積極的に肯定した上で構想される、望ましい政治とはどのようなものか、である。本書は修士論文が原型となつており、著者の研究者としての出発地点が、すでにそのようなものであつたことを示している。ただし、これまでに『国家学会雑誌』や政治学会の年報などで活字化された初期の形と比較すると、著者は今回本書をまとめることにより、自分の関心のありかを再発見し、整理しなおしたと見てよいであろう。

一

河野氏の最初の著書は、博士論文を元にした『明六雑誌の政治思想——阪谷素と「道理」の挑戦』(東京大学出版会、二〇一一年)であつた。明治初期を対象にした政治思想研究で、道德的権威への愛着や人格修養論から、政治的判断力を切り離し自立させようとする契機に着目しがちな傾向が一般にあつたとすると、阪谷素論に見られる河野氏のアプローチは、むしろ、政治の本質は、権力の公正な行使やそれを規定する制度設計ではなく、ひとりひとりの道徳的なコミットメントであると固く信じている思想家に着目し、そこから、道徳理念ではなく、政治思想を切り出すというところにあつた。ここでとりあげる『田口卯吉の夢』では、一見阪谷素とは正反対のタイプの思想家が対象となつてゐるが、実は著者の基本的関心は共通している。つまり田口の場合は、自己利益をあくまで追求する個人という、一見、阪谷素とは逆の意味で非政治的な人間観が基礎となるが、

序章では、明治期以来の田口像を整理しなおすことで、分裂した田口像のすきまに落ちてゐるかのように見える田口の思想家としての重要な特質がゆっくりと掘り出されていく。田口は、極端に割り切りのよい経済的自由競争論者というイメージが大きいが、他方、たとえばその南洋への関心が昭和の戦争期にアジア連帯論に強引に繰り込まれて称揚され、あるいは、『日本開化小史』に代表される「開化史」が実際のところ経済史ではなく政治体制史であるなど、その動機の一貫性があるのかどうかわかりにくい。そのため、現在にいたるまで田口についての様々な言説は、「専門分化した各学問領域が……各学問の枠組みにそつた学史的な位置づけを与えることに腐心してきた」

(九頁)。本書は、田口の用いる「自愛」「人心」「封建・郡県」を鍵概念としてその多岐にわたる言論活動を読み直し、また丁寧に同時代の言論状況を検証することで、政治思想家としての田口卯吉の像を結ぶことができる所とし、以下その作業に入つていく。

第一章は、田口の南洋への関心について、それがたとえれば志賀重昂の『南洋時事』(一八八七年)に代表されるような南進論に呼応したものではなく、個人を理性と利己心の単位として規定した時に、望ましい経済体制とは何かという問題意識を出发点にしていたことを論じている。一八七七年の『自由交易 日本經濟論』に見られるロビンソン・クルーソーへの関心がその手がかりとなる。もちろん、田口にとってのロビンソンは、後の経済学者が好む「近代的人間類型」ではなく、むしろ孤島にあつても理性というよりは「理」へ確信を保持し続ける頑固なこだわりによって内面から突き動かされる人間である。幕臣であつた田口の一家は徳川家に従つて静岡に移住したが、田口は書翰に静岡を「一孤島の遠洋にあるが如し」と記していた。田口の静岡経験は、この人間類型を実感から支えていたといふ。

第二章および第三章は、『日本開化小史』の分析にあてられる。『日本開化小史』は全六巻の刊行に一八七七年から一八八二年までと、比較的長い時間がかかつており、そのことも手伝つて、田口が全体で企図したものは何であったのかを明確に指摘するのは意外と難しい。また、同時代の評が概ね好意的で

あり、また昭和初期まで繰り返し出版され、永井荷風を含む後の世代からも高い評価を得てゐるにもかかわらず、戦後の思想史学からはそれほど重視されてこなかつたのは、意外でもある。福沢諭吉の『文明論之概略』が、戦前にそれほど出版・流通の機会には恵まれず、戦後は高い評価を得、多くの研究者の関心を集めてきたことと、興味深い対照をなしてゐる。

第二章の指摘で特に興味深い箇所は、福沢も田口もギゾーの『ヨーロッパ文明史』から大きな示唆を得てゐるという共通点にもかかわらず、田口は「開化史」において、福沢の『文明論之概略』に見られるような、西洋文明の進歩の内在的秘密を明らかにしそれに学ぼうという叙述方法と自己の方法を意図的に区別しているという点である。そして、第三章で論じられるように、田口は、未開から文明へではなく、「封建」「郡県」という政体類型の変遷と循環という枠組みを用いて、「開化史」を進行させるダイナミズムを解説しようと試みた。「封建」「郡県」の対比という歴史叙述スタイルが、新政府による全国の軍事的・行政的な掌握に役立てるため登場した地理書である中根淑(田口が一時期学んだ沿津兵学校の教授だったことがある)『兵要日本地理小誌』(陸軍省、一八七三年)の影響を受けていよいよ指摘も興味深い。

では、「封建」「郡県」類型をもちいた議論のどういったところが、田口の企図する「開化史」に寄与したのであろうか。田口は、「封建」的体制であった鎌倉政府、徳川政府を高く評

価する。ところが、徳川体制の崩壊で出現したのは、「封建」を成功させた条件それ自体が、政治体制を内部から腐食し、当の体制の崩壊を生み出した皮肉なプロセスである。著者の詳細なテクスト検討をすべて紹介することはできないが、あえて簡潔にいえば、「封建」の成功と失敗のいずれも、その体制が、小さく区分けされた集団への愛着と責任感の涵養・強化に頼っていたという点が原因である。田口の分析によれば、「封建」は、人々の元来「私利」を追い求める気力を「一郡一村」に分割された中間集団単位ごとの忠誠心に束ねることで、最終的に社会全体の秩序を整える制度である。これが中央権力と地方権力、また階級間の均衡を維持できている間はうまく機能する。しかし、幕末の日本が経験したように、日本一国単位での「愛國」が必要な事態になると、中間集団ごとに「忠義」を編成する制度は解体する。これが、「封建」が「愛國」者によって内側から倒された原因である（一一〇頁以下）。そして、明治新体制は「郡県」制度である。この体制では中間的な単位であらかじめ整序された「忠義」に期待することはできない。「郡県」においては、社会的秩序に配慮することを前もっては期待できない「私利心」とその動向（勢）の制御こそが体制安定に不可欠となる。著者は、田口が憲法と議会制度にその「勢」の制御装置としての役割を期待したと推定する（一一七頁以下）。この点は田口自身がそれほど明確な言説を残していないので、やや傍証に頼る分析になつてはいるが、立憲政体を支持する者の中

に、「封建」的原理の再構成が好ましいと考える立場と、それは既に不可能であり、「郡県」に対処すると割り切つて考える立場との、大きな違いが存在するという見方は、おそらく当を得ている。田口は、立憲政体が、自発的な公共的関心が中間集団によつてある程度組織された上で成り立つというヴィジョンを信じることができない。それはすでに失われた「封建」へのノスタルジアにすぎない。むしろ人々があらかじめ適度に編成された「忠義」などもたない、「私利」だけに動機づけられたものであると割り切る方が、結局は「人情」に即した政治体制が構想できると田口は考えた。

第四章では、改めて明治初期の「集権」・「分権」論争状況と照らし合わせながら、田口の政治体制構想を検討している。「封建」・「郡県」を対比する議論は、廢藩置県、秩禄处分とからんで、「分権」対「集権」という議論に結びつき、さらには西南戦争とその後の地方制度の構想がからんで、明治十年前後には一つの重要な政治的争点となつた。福沢諭吉の『分権論』もそれを背景にしたものである。実は、田口のよつにはつきりと「集権」および「郡県」を是とする主張は、言論界では分が悪い。当時、多くの論者は明治政府批判の一つの論点として、権力・経済力のみならず、人材の中央への集中と、地方における「人民の精神氣力」の衰微を憂慮していた（明六社での議論。一四九頁）。田口はこの言論状況をにらみながら、明治新体制にとつてこの試練は、従来の日本の歴史にあつた「封建」・「郡

県」の循環から抜け出す貴重な機会であることを強調する。田口からすれば、「封建」の「氣力」を維持しようという主張は、社会を枠（城郭）で仕切つて、流通を制限し、それによって

各々の枠内での精神的圧力を高めることで、「氣力」を高めようとする方法である。これは時代状況によっては有効であったが、もはや使えない。今日有効なのは、循環の速度と量を上げて、国家という大きな身体の活力を高める方法である。いわば田口の要求するのは国家を身体として見た場合の身体観の切り替えである。

第五章では、個人の「自愛心」だけを基礎にして社会の成り立ちを説明しようとする田口の試みに着目する。田口の人間観・社会観の骨格と時性を明らかにするため、同時代人の「利己」・「利他」・「善」の定義、「進化」と「社会」についての論争を整理し、田口が立っていた位置を丁寧に描いている。田口は他者への配慮を基礎においていた個人というモデルを明確に批判する。「慈善」にも「仁政」にも反発するのもそのためである。「仁政」が実際には作為的に歪められた財の再分配であって、それを表面的に美化しているだけであるという批判は福澤諭吉にも見られるが、福澤が権威主義と依頼心の固定化を懸念し批判している、つまり個人の自立への気概が失われることを問題化するのに対し、田口の場合には「利己」が「利己」のままで道德的秩序を形成する（二二八頁）社会構想を構築していくことが重要な課題となっている。これは「封建」論批判と重

なって、人の「氣力」維持の問題に社会構想を還元してはならないという信念が、田口の場合自觉的に表明されているということである。

第六章では、地租増徴をめぐる論争（一八九七年から九八年）を中心に、田口が農業立国的構想に反発したのは、どういった政治構想が根底にあるのかを検討する。そのために、一八八〇年にかかれた「経世余論ヲ読ム」という、神田孝平『農商弁』（一八六一年、文久二年）への批判論文にさかのぼり、産業の社会的役割を評価する際に精神論をもちこませまいとする田口の方法的な一貫性を確認する。その上で、地租増徴論争が単なる政策論争というよりは、谷干城ら増徴反対論者が抱く、税制や財政論に「精神」や「氣力」論を動員する傾向への明確な批判があつたことを確認する。田口にとっては、谷のように「農」は「商工」より精神的に上位にあるという前提での議論は、明治一〇年前後の「封建」の延長線上にある。

終章では、田口が折に触れて用いていた「経済上の共和国」・「商業共和国」にまず着目する。田口自身がこの概念について詳しい議論を残したわけではないが、本書でこれまで分析されてきた田口の思想とのつながりは明らかである。田口が新しい時代の人間像と政治体制像として構想するのは、他人の世話を焼き、思いやり、保護しようとする「慈善」や「仁政」ではなく、個人が互いの「利己心」を尊重しあうことによって成立する「共和国」であった。著者は控えめにしか指摘していない

いが、田口は、十八世紀のモンテスキュー・スコットランド啓蒙が構成する思想圏にすなわち自由な市場と商業取引で活動する個人こそが倫理的な共同体（「私利」と「分業」）が生み出す「共和国」を構成できると考える思想圏にあった。坂本多加雄が福澤諭吉をそのような思想家として描いた研究はよく知られているが、本書の分析にしたがって再考すると、福澤は西洋の十八世紀啓蒙の共和主義を、日本で議論されてきた「封建」と「氣力」のコロラリーに領有しようとした思想家である。福澤や徳富蘇峰など、政府の指導と管理よりも個人の自由を尊重する立場の論者であっても、田口の目からすれば、あまりにも「封建」の磁力にひきつけられており、根拠のあやしい「精神」や「氣力」を根拠として政策論を組み立てていた。これに対し田口は「封建」・「郡県」類型が明治国家の設計にどのように影響するのかを検討し、意図的に「封建」・「氣力」論から引き剥がそうとした思想家であった。

三

拙評のまとめに、本書が現在の政治思想史研究に對してどのような含意をもつかを述べておきたい。ひとつは、明治思想における田口の位置づけのやりなおしと、それによる明治期政治思想の配置図の見直しである。従来の研究では、自由な市場の機能を尊重する自由主義経済理論の先駆的な理論家、そしてその理論にもとづく政策を唱導する論者として紹介されるレベル

でとどまることが多い、田口の人間觀・歴史觀・政治体制觀の有機的連関に踏み込んだ分析はほとんどおこなわれてこなかった。おそらく思想史研究者の多くにとつて、田口は、自己利益極大化だけを目指す個人という人間觀に居直った平板で陰影に乏しい経済理論家に見えてきたからであろう。つまりなかなかその思想的動機を探ろうという興味がわからない人物と見られた。ところが、河野氏が提示する田口の視座からすれば、たとえば、福澤諭吉や（少なくとも『國民之友』を始めたころの）徳富蘇峰のように権威主義を批判した思想家は、公共的動機と自己の経済的利益が一致するようにできている気概ある個人という、落としどころがあらかじめ用意された社会の担い手の構想にとらわれているという点で、古めかしい秩序觀の磁場に安住していたように見ることもできる。田口の「封建」批判の独自性はここにあり、田口と福澤の違いの根は深い。明治の自由主義者は同時にナショナリストであったというようなおざつぱな定式化では、もはや政治思想分析としては甘いということが方法論の高みに立つてではなく、具体的な思想家の言説分析を通じて示そうとした試みである。

もう一つは、現代の政治理論に対する含意である。終章でマイケル・イグナティエフへの簡単な言及があるが、イグナティエフがスコットランド啓蒙思想を踏まえつても現代福祉国家の正当性を視野において検討した問題、すなわち顔が見える他人への配慮や共感ではなく、市場での交換や分業を通じて得られ

る公正な財の分配、あるいは国家という装置による道徳的機能（市場では調達できない福祉や安全の分配）の「分業」を積極的に肯定し、その制度維持にコミットすることの意義を考える上で、田口の思想は貴重な題材となる。田口と同時代の、西洋自由主義の影響圏内にいた思想家たちが、ほとんど「封建」概念を用いながら分権的秩序を擁護し、中間的な公共性をつみあげることで、より公正で人々の共同的な感情からも支持できる国家をつくるべきであると主張したのに対しても（福澤諭吉も徳富蘇峰もトクヴィルをよく読んでいた）、田口はあえて、お互いの顔の見えない利益の交換ができる市場を擁護し、お互いの利益や感情を直接には配慮することのない関係の共同性を機能させるための、第三者的装置としての国家を要請する（そのためあえて「郡県」を擁護する）。それだからこそ、田口にとって「私利心」あるいは「自愛」が公共性の基礎となりうる。自分が協力し合いたい人に配慮し、その利益や安全を守ろうとするのではなく、そのような配慮と利益の直接的共同性がないところで、公正な社会を運営できる制度を肯定し、それにコミットできるという考え方を日本の政治的議論空間にもたらしたという点で、田口の貢献が大きいと著者は考へているのである。ただし、著者は、本書が田口卯吉を材料にした理論的提言のような叙述に陥らないよう、この理論的含意については非常に禁欲的である。

今後、河野氏の関心が、これまで思想史的分析の光を十分にあてられてこなかつた思想家の歴史的な像を明らかにすること

に向かうのか、それとも、田口卯吉論や阪谷素論から垣間見える、政治それ自体には積極的な価値を見いださない人間がつく政治体制の論理構造という問題により深く分け入っていくのか、興味深い。おそらく両方を追求しながら、両者がしだいに有機的に結びついていく政治思想史研究というのができあがつていくことが望ましいであろうし、また河野氏がそれを実行する力量をもつことについては、評者は疑わない。

注

- (1) 著者はおそらく不必要に術学的叙述になることを避けて明確には踏み込んでいないが、明治初期の地誌はさらに徳川時代の「封建」・「郡県」循環論を継承している。これについては前田勉「近世日本の封建・郡県論のふたつの論点」（『江戸後期の思想空間』ペリカン社、二〇〇九年）を参照。もちろん著者は、「封建」・「郡県」をめぐる賴山陽の議論や中国での論争は踏まえている。本書第三章註三六、三七、四〇を参考照。